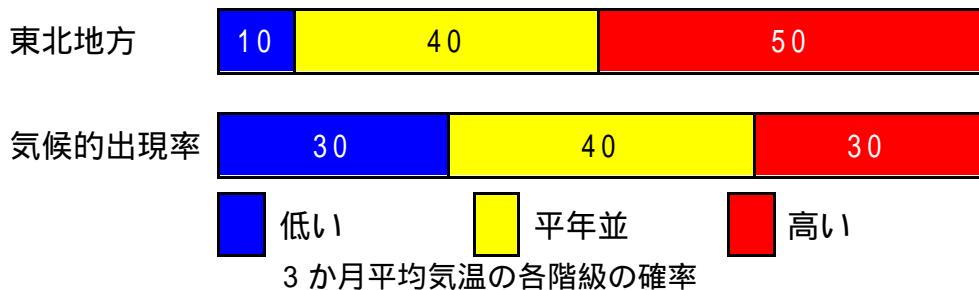


東北地方 3 か月予報 (8 ~ 10 月) の解説

平成 12 年 7 月 19 日 仙台管区気象台

1. 予想される天候

(1) 3 か月平均気温の予想される各階級の確率 (%)



[概要]

8 ~ 10 月の 3 か月平均気温は「高い」の可能性が最も大きく、その確率は 50% です。「平年並」の可能性が次に大きく、その確率は 40% です。「低い」の可能性は小さく、その確率は 10% です。

(2) 可能性の大きな天候の特徴

	8月	9月	10月
天候	東北地方は太平洋高気圧に覆われ平年に比べ晴れて暑い日が多いですが、寒気や前線の影響で天気のぐずつく時期があるでしょう。	東北地方は太平洋高気圧に覆われ残暑がきびしい日もありますが、高気圧と低気圧が交互に通り、天気は周期的に変わるでしょう。また、前線の影響で天気のぐずつく時期がある見込みです。	東北地方は平年と同様に高気圧と低気圧が交互に通り、天気は周期的に変わるでしょう。
気温	高い	高い	平年並
降水量	平年並	多い	平年並

なお、8 ~ 10 月の 3 か月間の降水量は「平年並」の可能性が大きいでしょう。

<参考資料>

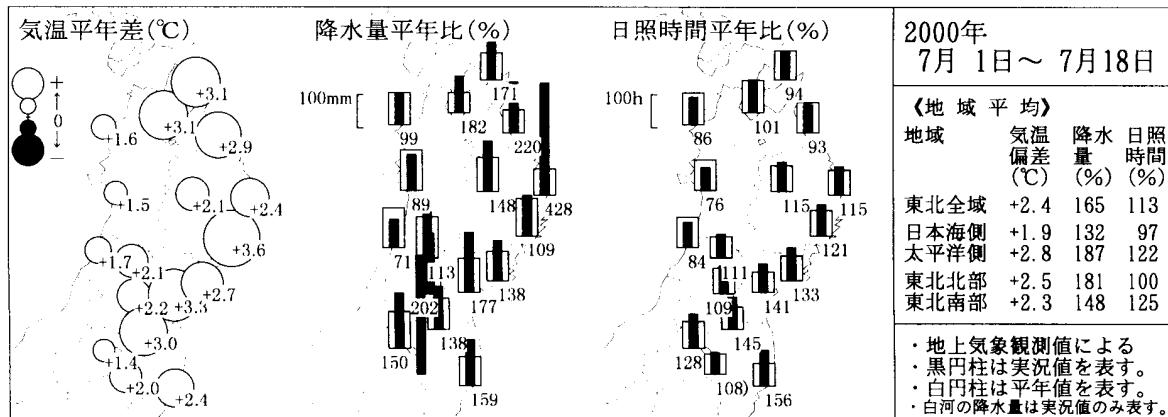
平年のおおよその天気出現割合 (%)

	8月		9月		10月	
	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側
晴れの日	62	55	53	49	52	61
雨の日	31	33	42	39	41	29

注：季節予報では、「日照率 40% 以上の日数」、「日降水量 1mm 以上の日数」を晴れの日、雨の日の目安として用いている。この 2 つの事象は同じ日に起こりうるため、両方に数えられる日もある。日照率は、1 日の日照時間を可照時間（太陽の中心が東の地平線に現れてから西の地平線に没するまでの時間）で割った値である。

2. 最近の天候経過と循環場の特徴

(1) 最近の天候経過



東北地方における7月(1～18日まで)の平均気温、降水量、日照時間平年差(比)

7月(18日まで): この期間の平均気温平年差は東北地方で+2.4と平年を上回った。降水量平年比は、東北日本海側で132%と平年を上回り、東北太平洋側で187%と平年を大きく上回った。日照時間平年比は、東北日本海側で97%と平年を下回り、東北太平洋側で122%と平年を上回った。

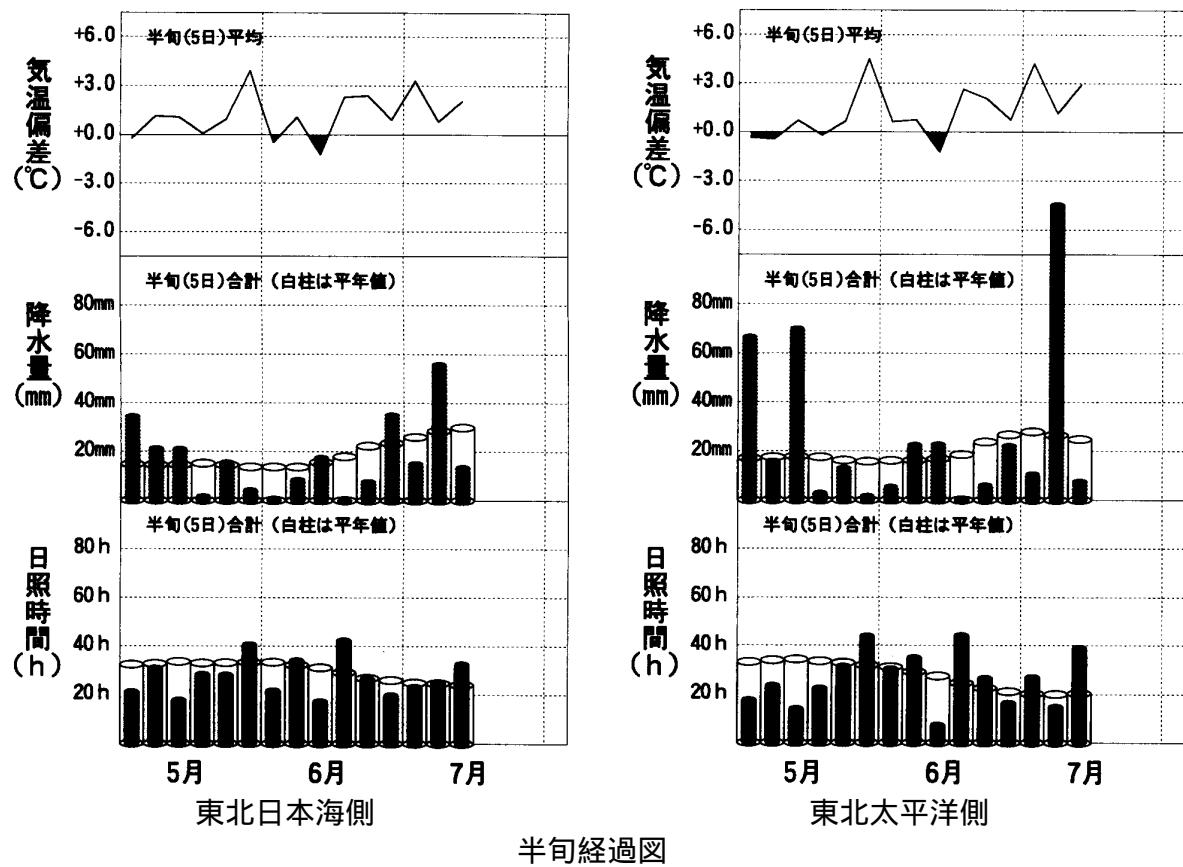
上旬、1日は梅雨前線が東北北部に停滞していたため曇りや雨のところが多かったが、東北南部では概ね晴れた。また、8～9日にかけては台風第3号が日本のすぐ東海上を北上したため、東北地方は太平洋側を中心に大荒れの天気となった。8日には日降水量が、宮古で319.0mm(通年1位)仙台で124.0mm(7月として1位)八戸で112.5mm(7月として1位)を記録するなど各地で大雨となった。その他の日は、東北地方は高気圧に覆われ晴れて暑い日が多くなったが、上空に寒気が入り大気の状態が不安定となって雷雨のところがあった。4日は岩手県で降ひょうによる農作物の被害が発生した。

なお、東北北部では5月半ばから、宮城県や山形県では6月半ばから少雨の状態が続いていたが、台風第3号による大雨で概ね解消した。

上旬の平均気温平年差は東北地方で+2.2と平年よりやや高かった。降水量平年比は、東北日本海側で126%と平年並、東北太平洋側で250%とかなり多かった。日照時間平年比は、東北北部で96%と平年並、東北南部で136%と平年よりやや多かった。

中旬(18日まで)は、はじめ高気圧に覆われおおむね晴れて、真夏日となるところもあったが、12～13日にかけては上空に寒気を伴った気圧の谷の接近で大気の状態が不安定となり、雷雨となるところもあった。15～18日は梅雨前線が日本海まで北上し、この影響で東北地方は曇りや雨の日が続き、雷雨となるところもあった。

中旬の平均気温平年差は東北地方で+2.7と平年を上回った。降水量平年比は、東北日本海側で147%と平年を上回り、東北太平洋側で96%と平年を下回った。日照時間平年比は、東北日本海側で85%と平年を下回り、東北太平洋側で123%と平年を上回った。

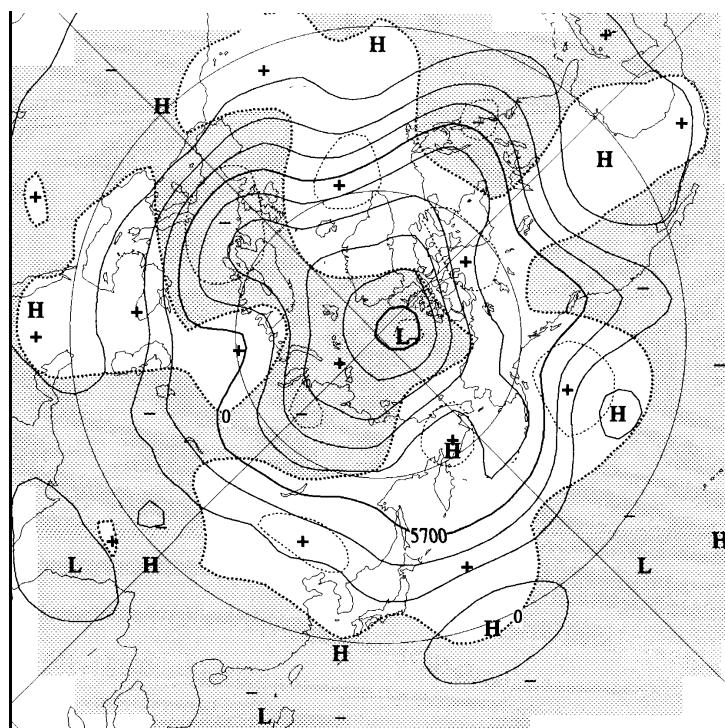


半旬経過図

(2) 中・高緯度の循環

7月(18日まで): 極東域では、日本を含む中緯度帯は正偏差に広く覆われ、特に中国東北区に中心を持つ正偏差域が顕著である。一方、日本の南岸から低緯度にかけては負偏差が広がり、日本の南では亜熱帯高気圧の張り出しが弱かった。

日本付近への強い寒気の南下はなかったが、北日本は弱い谷場となつてあり、しばしば上空に寒気が入って大気の状態は不安定となりやすかった。



7月1~18日平均 500hPa 天気図

等高度線間隔 60m

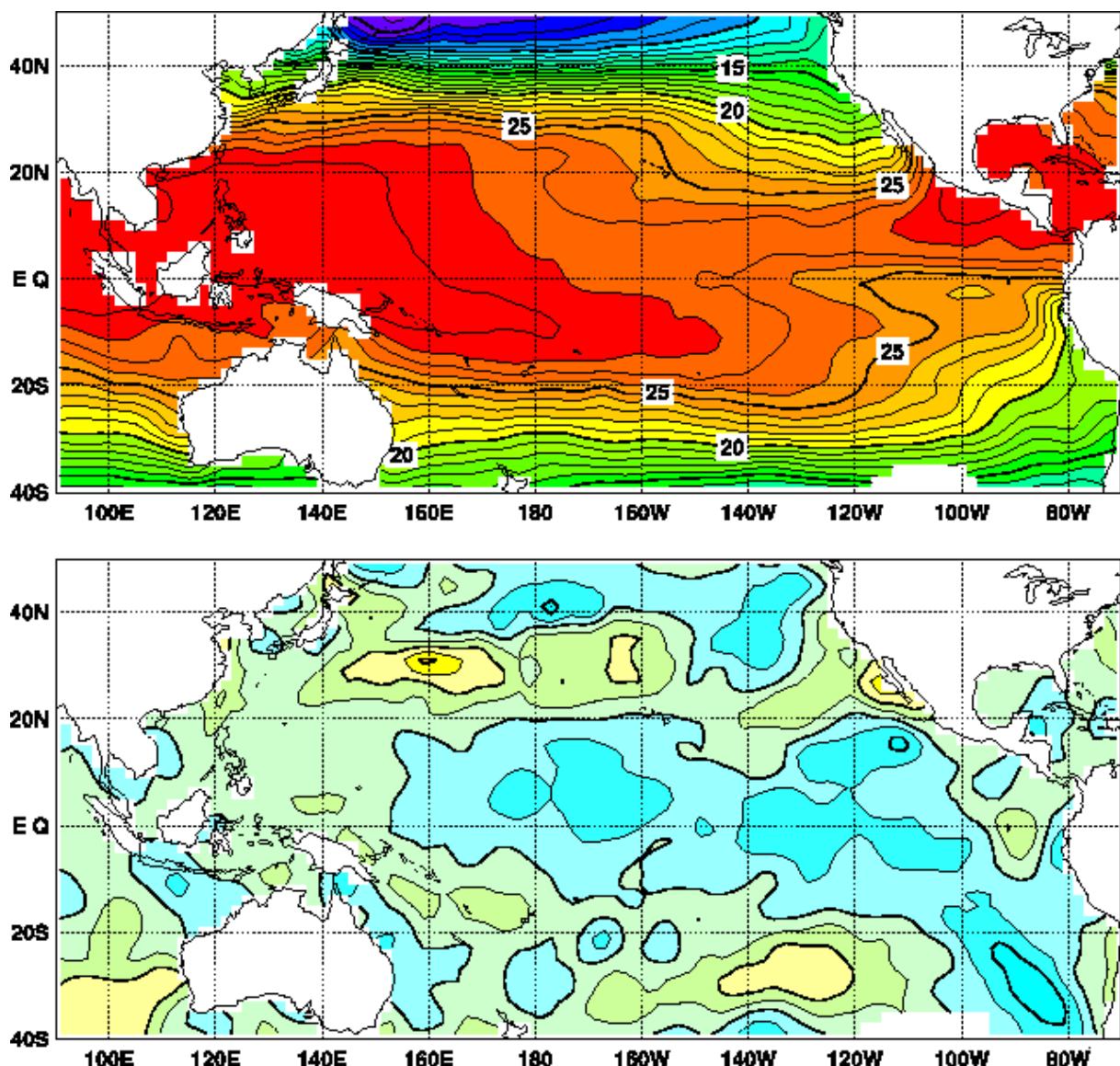
陰影部は平年より高度が低い領域

(3) 热帯太平洋の状況

エルニーニョ監視海域（北緯4度～南緯4度、西経150度～西経90度）の6月の海面水温偏差は、-0.4度であった。5ヶ月移動平均の4月の値は-0.3度となり、昨年夏に始まったラニーニャ現象は、今春に終息した。

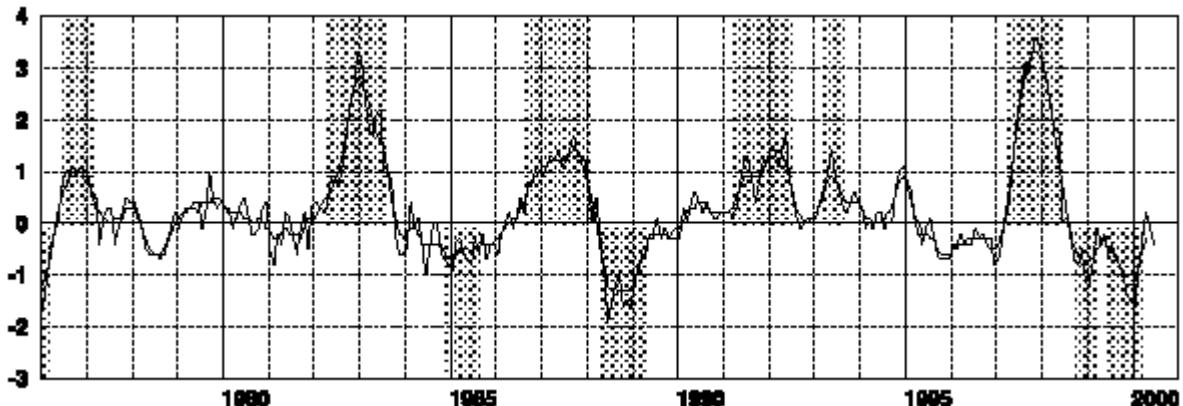
6月の太平洋赤道域の海面水温は、西経175度から西経160度、西経150度付近、西経140度から西経110度で平年より0.5度以上低かった。西経90度付近では平年より0.5度以上高かった。東経150度以西の海面水温は平年より高かったが、+0.5度より大きい正偏差は見られなかった。

6月の南方振動指数は-0.5（暫定値）であった。（南方振動指数は貿易風の強さの目安であり、正（負）の値は貿易風が強（弱）いことを示す。）



2000年6月の海面水温図（上）及び平年偏差図（下）

海面水温図の太線は5度毎、細線は1度毎の、平年偏差図の太線は1度毎、細線は0.5度毎の等值線を示す（平年は1961～90年の30年平均値）



エルニーニョ監視海域の月平均海面水温偏差（）の推移（1976年1月～2000年6月）
 折線は月平均値、滑らかな太線は5か月移動平均値を示し、正の値は平年（1961～90年の30年平均値）より高いことを示す。エルニーニョ現象の発生期間は正偏差で、ラニーニャ現象の発生期間は負偏差で、それぞれ陰影を施してある。

（4）エルニーニョ監視海域の海面水温の今後の見通し（2000年7月～2001年1月）

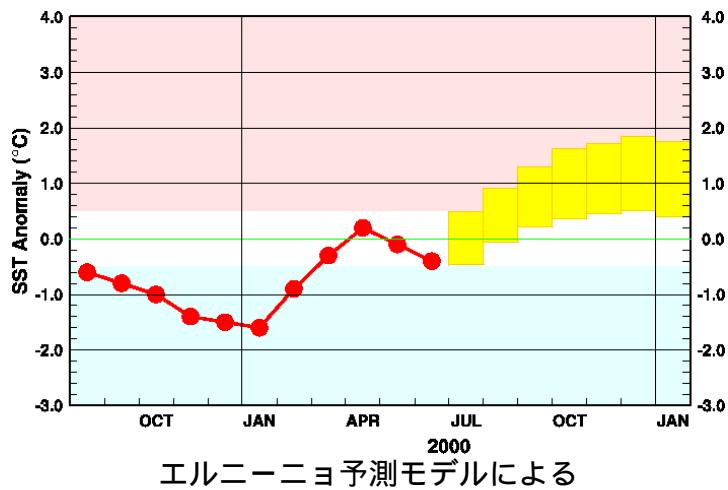
エルニーニョ監視海域の海面水温は、夏は平年並、秋以降は平年よりやや高い状態で経過すると予測される。

【解説】

海洋表層では太平洋赤道域西部に見られる正偏差域が次第に東に広がりつつあるが、太平洋赤道域の海面水温は、広い範囲で弱い負偏差が続いている。また、太平洋赤道域の一部では、貿易風が依然として平年より強い状態が続いている。

エルニーニョ予測モデルは、監視海域の海面水温が今後正偏差に転じ、年末にかけて偏差が増大すると予測している（右図）。

太平洋赤道域の大気の状態には、依然としてラニーニャ現象の時の特徴が残っており、監視海域の海面水温偏差が今後急激に変化する可能性は小さく、夏の期間、監視海域の海面水温は平年並と考えられる。太平洋赤道域中・西部の表層に見られる水温の正偏差域が次第に東に広がっていることから、秋以降の監視海域の海面水温偏差は、正偏差になることが予想されるものの、予測モデルが秋の海面水温を実際より高めに予想する傾向が見られることを考慮すると、エルニーニョ監視海域の海面水温は、モデルの予測よりもやや低い状態で経過すると考えられる。



エルニーニョ予測モデルによる
 エルニーニョ監視海域の海面水温偏差予測

3. 前回（6月20日）発表の3か月予報からの変更点

8月 気温 平年並 高い

9月 気温 平年並 高い 降水量 平年並 多い